

ろう教育一年生教官のろう教育観

— 4年間のろう教育を省みて —

電子情報学科・情報工学専攻 高橋 秀知

要旨：今日に至るまでの4年間、聴覚に障害を有する学生に、情報工学分野の授業と実習を行ってきた。更に、第一期生の就職活動・卒業・卒業後の実社会生活での悩み事への対応、また、現在の不況下での第2期生の就職等を通じて得られた実社会の求めている学生像に対する知識等、考えても見なかった事態の連続であったが、学生に対しては、常に積極的な社会的自立と社会の一員としての自覚に立った社会的貢献の出来る広い意味での教育を志向してきたつもりである。この考えは、必ずしも誤っていなかったと思っている。実社会の求めている卒業生像は、円満な人格を持った人間性を有する人物像にあると思う。

キーワード：ろう教育、基礎知識、常識、実社会の求める卒業生像、積極的社会自立、社会的貢献

0. はじめに

これまでの専門分野が、数学・物理学・加速器科学・情報工学等の理工学の分野に属していた「ろう教育」の一年生教官の教育観のようなものを披露し、ご参考に供したいと思う。

「ろう教育」に関しては、一年生教官であるため、毎日毎日が、苦闘の連続の状況となっている。このような経験浅き「ろう教育」の一年生教官にも、実際の「ろう教育」を4年目になると、それなりの教育観?のようなものが、感じられつつある昨今である。以下、この4年間の教育を通して、感じたこと、得られたこと等についての感想と所信を記述したい。

1. コミュニケーションについて

教育においては、コミュニケーションの質と量とによって、教育効果に多大の影響が与えられることは、十分に予測されることと思われる。

一般的に、集団生活の構成員は、その集団固有のコミュニケーション方式により、構成員間でのコミュニケーションを行っている。この意味から健聴者集団のコミュニケーション方式は、音声言語と文字表現が主流と考えられる。一方、聴覚障害者集団のコミュニケーション方式主流は、手話であり筆談等であると考えられる。したがって、両集団構成員間でのコミュニケーション方式は、両方式及びその中間方式としての口話・読話等によって行われる必要があると思う。例えば、日米両国民間でのコミュニケーションの円滑化には、お互いの母国語としての日本語と英語を、お互いに学習する必要があるように。この意味において、健聴者集団の構成員が、圧倒的

に多い現社会においては、聴覚障害者に対して、読話等の学習が期待されることは、仕方のないことと考える。これと同様に、健聴者に対しては、聴覚障害者のなれ親している手話・指文字等の手指言語を学習する必要があることも至極当然のことと考える。

この背景に立って、以下、私見を展開したい。

1) 手話か口話か

前述の観点から考えると、少なくとも教育の場においては、手話か口話かの議論は、或る観点に立つと、余り重要な事項とは考えられないように思われる。重要なことは、「どのような方法でも、お互いの間に、潤滑なコミュニケーションとより豊富な情報伝達が成立すればよい。」と考えるからである。

2) 授業の現状

それでは、実際の教育現場では、どのようなコミュニケーション方式が採用されているのかを考えてみると、少なくとも私の場合は、手話・口話・板書・OHP・プリント・空書等、あらゆる方式を総動員し、その場その場で、最適と考えられる方式を採用し、実施しているのが現状である。

一般的に、次のような状況であると予測される。入学当初においては、手話や読話が不得手な学生なも見受けられる状況下と、教官の教育に対する考え方によって、種々の方式が採用されているようである。口話を中心としたコミュニケーション方式により授業を進める場合もあれば、手話を中心としたコミュニケーション方式によって、授業を進める場合もある。前者は、卒業後の環境を考えると、読話能力が必要であるとの観点に立つものと考えられ、一方、後者は、手話が、聴覚障害者の日

常的コミュニケーションの方式との観点に立ち、より豊かな情報伝達を計りたいとの考えによるものと思われる。

その上、本学のように技術教育を主体としている高等教育機関においては、新技術にたいする手話が、必ずしも確立していない状況もあって、授業の進行には、試行錯誤の連続状況にあるのが現実である。

更に、知的・学問的コミュニケーション以外に、聴覚障害者との「心のコミュニケーション」が、教育の場では重要との観点に立つと、手話や指文字等は、重要なコミュニケーション方式と考えられる。ここまで踏み込むと、「教育とは何か？」と云う教育の本質論にまで遡ることになる。教育学に全くの素人である私には、このことに正面から議論出来る素地は、残念ながら持ち合わせていないが、これまでの健聴者に対する専門教育と人生経験からして、次のように考えている。

教育とは、一般的には、

- A) 学問・知識を教えること、
- B) 物の考え方・見方を教えること、
- C) 実社会の規範・規則・約束ごと等の常識・マナーを教えること

等が、その範疇に入っているものと思われる。この観点に立って考えると、「心のコミュニケーション」は、教育現場では、大切な要素の一つとなる。学問・知識等は、書物によっても、ある程度、獲得が可能と考えられるが、「物の考え方・見方」や「社会の常識・マナー」は、書物を読んだだけでは、なかなか理解や獲得が出来ないものと思われる。特に、後者については、各学生は異なる個性や背景を持っているため、より困難性が高いと思われる。それは、万人が一様に理解できる表現形式が、存在しないからでもある。したがって、この意味からも、手話・口話等を健聴者集団が、学習する必要性があるものと考えている。

実際の教育経験から感じることは、手話・口話等が大切なことは、云うまでもないが、それより重要なことの一つに、「何とかして、自分の考えていることを相手に伝えたいとの意志・意欲の強さ」のようなものが、必要と感じている。極言が許されるならば、意志・意欲が強ければ、自ずとコミュニケーション方式も開けるように感じている。

2. 一般常識・マナーについて

一般的に、聴覚障害者の学生の中には、(少人数教育であるため、余計に目に付くとも考えられるが) 一般常

識・マナーに欠けている者が見受けられる。入学以前の教育段階で、そのような教育を受けて来なかったのではなかろうかと思われる場合もある。そこで、集団生活の最小単位としての家庭(この場合は、小数人で構成されている親族集団と云う特殊な集団)及び、それより広範囲の集団(ここでは、親族の他に、他人との混成・同年齢の特定集団)としての学園生活において、指導的立場におられる方々のご協力を期待したいと考えている。

大学教育と云う環境は、入学以前の基礎学力の上に立って、高等教育を行うことになっているとの観点に立つと、一般常識・マナーを教えるところまでは、一般的には、教育計画に入っていないと思う。

1) ろう学校への期待

高等教育機関において行う教育は、必要と考えられる最小限度の「学力と常識・マナー」の既修得を仮定している。学力については、入学試験等によってある程度検査可能であるが、常識・マナーまでは、特殊な場合を除くと、不明の状況で入学する場合もある。このような状況で入学した学生に対して、高等教育機関では、通常、常識・マナーのために裂くだけの時間的余裕は無いと思う。

一方、大部分の学生は、大学・短大が最後の教育機関となる状況で、実社会に巣立って行くことになる場合が多い。実社会では、未知の分野を自分で切り開き、好むと好まざるとに係わらず、与えられた仕事を、与えられた期間内に行うことを要求される。高等教育機関では、そのための「基礎学力」・「物の考え方・見方」・「未知の分野に立ち向かうための気力」を、3～4年間で教授するのが限度と考える。

2) 保護者への期待

集団生活の最小単位としての家庭生活(家族集団)の開始は、特殊な集団であるが、最小限度の常識・マナーを教える環境として、極めて重要な場所であり、時期にあると考えられる。この時期に適切な常識・マナーを教わらない学生は、生涯理解し得ない状況となることも予測される。それ故、集団生活の基礎を学習する時期として、極めて重要な時期と考えられる。

3. 実社会の求めている人間像

今回、第2回目の卒業生を世に送り出すに当たり、就職活動の一環として、実社会との接触を通して、実社会が卒業生に求めている人間像につき、感じたことを記述したいと思う。

一般企業の卒業生に対する期待は、卒業相当の学力を

求めていることは、当然のことであるが、それと同等以上期待されている事項として、

- 1) 一般常識の有無
- 2) 配属集団構成員との協調性
- 3) 新事態への対応性・適応性

に、集約されると思われる。その理由としては、種々考えられるが、

- A) 配属先の職場・仕事に早くなれて、実戦力として、一日も早い活動開始を期待していること。
 - B) 他の社員との円滑な日常生活が可能であること。
 - C) 新しい仕事に対応出来る気力と体力を有すること。
- 等が上げられると考える。したがって、「学力と豊かな人間性」は、車の両輪のような必要事項と考えられているように感じられる。

4. 学生への期待

聴覚障害者の高等教育機関として、筑波技術短期大学が創設された目的は、種々考えられると思うが、その内に、以下の3点があるものと思っている。

- A) 聴覚障害者の全般的教育水準の向上
- B) 自力による積極的な社会的自立
- C) 指導者の養成

以上につき、私見を試みたい。

- 1) 聴覚障害者の全般的教育水準の向上

健聴者の場合の高等教育進学率は、30%程度と考えられるが、聴覚障害者の場合のそれは、その1/5程度と聞いている。これでは余り差が有りすぎる。この状態を乗り越えて、少しでも健聴者の進学率に近づける必要がある。そのため、高等教育機関の誕生による、高等学校・中学校・小学校等の教育水準の向上が期待される。現に、受験生の学力も年々向上しているように見受けられる状況にある。

- 2) 自力による積極的な社会的自立

これまでの社会自立は、周囲の援助による消極的自立であったように見受けられる。これからは、「自らが考え、行動し、結果の如何を問わず責任を取る」積極的な自立と社会に貢献出来る能力とを、養成する必要があると考える。実社会に出ると、結果の良否の関わらず最終判

断は、自分が下す必要があるからである。

3) 指導者の養成

これまでは、健聴者が聴覚障害者の指導者になっている場合が大部分の状況であった。健聴者が、「聴覚に障害を持っていると、このような状況になるのであろう。」との推測は可能であるが、推測の域を出ることは不可能と考える。一方、多分、聴覚障害者の立場から考えると、「このようなことが、何故理解してもらえないのであろうか？」と云う、「何故」が、常に付きまとっているように感じられる。この両者の考え方・感じ方の相違は、いつまでも平行状態になっているように思われる。したがって、聴覚障害者の指導者には、心理学的観点からも、聴覚障害者の指導者が、より良いと考えられる。更に、自分と同じ環境の人が、指導者となっていることを目の当たりにすると、努力次第では、自分にも可能性が充分にあるとの観点からも、重要なことと考える。

5. 健聴者への期待

聴覚障害者は、たまたま聴覚に障害を有したとの考えに立てば、聴覚情報に対するコミュニケーションに関しては、円滑性を欠くが、その他は健聴者と同じである。したがって、コミュニケーションを円滑にするための努力を、健聴者集団も行う必要が有ると思う。この観点に立ち、

手話の早期教育の実現を期待したいと思う。

例えば、小学校の低学年の時期に、週に一回程度、正課としなくとも、行えればと思っている。小学校低学年の時期は、多分、遊び感覚での学習になると思うが、それでも良いと思う。熟年・老年期での修得は、大変に困難となるからである。

6. おわりに

聴覚障害者と健聴者とを意識しない教育、接し方が大切と考える。私自身も、昨今は、ほとんど意識しないで学生と接している。

このように、健聴者と障害者との間のコミュニケーションの円滑が一日も早く到来することを願っている昨今である。